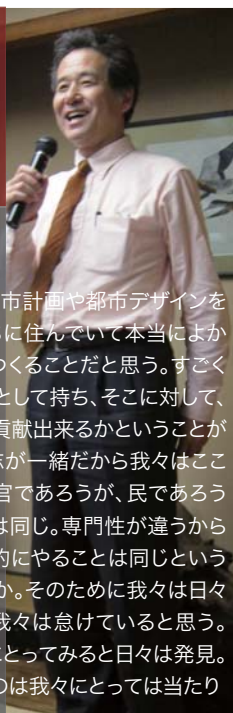


年の始めは、忘年会演説録 先生方のお言葉を胸に
Speech at the year-end party 2009 -Words of Teaching Staffs

2009年12月16日、本郷鳳明館にて行われた忘年会において、先生方より頂いた、お言葉を胸に今年も都市デザイン研究室は動き出しました。今号では西村先生と窪田先生の演説を収録しました。

The year-end party was held on 16th December at the Homeikan. Then our laboratory's teaching staffs made speeches. This issue records Professor Nishimura's and Associate Professor Kubota's words.

text_abe

西村 幸夫 教授
**「我々は怠けている
高い志を持って」**

我々は何のために都市計画や都市デザインをやっているのか。このまちに住んでいて本当によかったというようなまちをつくることだと思う。すごく簡単な話。それを共通点として持ち、そこに対して、自分の能力でどのように貢献出来るかということが大事で、それが高い志。志が一緒だから我々はこのあつて議論が出来る。官であるうが、民であるうが、学であるうが気持ちは同じ。専門性が違うからやることは違うが、最終的にやることは同じということを共有出来るかどうか。そのために我々は日々努力しないといけない。我々は怠けていると思う。なぜかという、留学生にとってみると日々は発見。こんな宴会があるというのは我々にとっては当たり

前でも留学生にとっては発見。だから、我々は安住しちゃいけない。そういうimaginationをもっていないといけない。

都市計画という学問が他とすごく違うのは総合的なところ。皆の力がないと出来ない。1人ではできない。相手は都市だから、1人で全部出来るわけがない。総合的に皆で協力しながら、しかしなおかつ、皆である方向を向いて、そこにはっきりとした哲学がある。皆が幸せに、本当に喜ぶ顔が見られるような、そんなまちをつくること。そこに向かって各人がやるのはパーツだが、それを頑張るということ。頑張る気持ちを皆が一緒にもてるということがすごく大事で、それをもてる仲間と一緒に出来ないといけない。もてない仲間と無駄な時間を過ごしてはいけない。この場合はそういう場でありたいと思うし、これからもそういう形でやっていきたい。

我々が経験出来ることは都市の全体からいえば本当にごく一部。でも、なぜそれでプランニングができるかという、それは我々自身が人の立場を考えることが出来るから。プロジェクトで、様々な都市の人の話を聞いて、そういう人生に寄り添える

imaginationをもてるのが大事。だから、それを磨くこと。それが日々のプロジェクトであり、今のプロジェクトはそのためにある。

様々な人に出会う、様々な人生がある。「家庭」というひとつの言葉だけど、それは各々の建物にあつて、灯りが点いている。まちを歩いて、電車に乗つて、灯りがあると、そこにはひとつひとつの家庭があつて、全部違うドラマがある。そういう風に思えるかどうか。プロジェクトで様々な人に接して、そしてimaginationの中で、自分の人生はひとつだが、様々な人生を生きたられる。その才能があるのは君たちだと思っている。

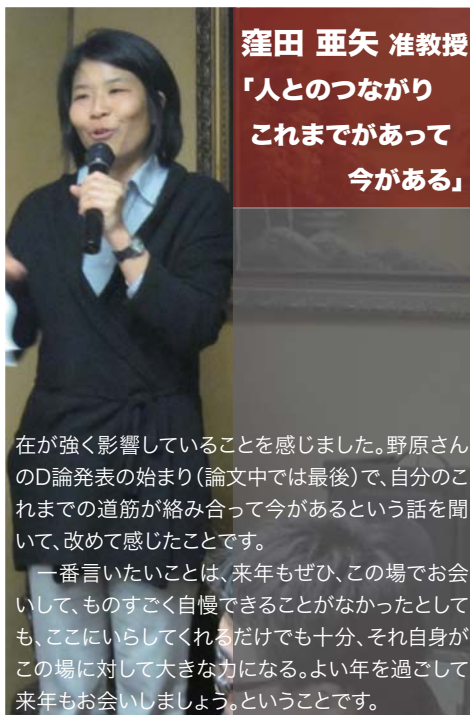
日々、生活に疲れて来ると、自分の生活だけしかなくなるけど、そうじゃない。背後に様々なことがあると知ることがすごく大事。ぜひ、それを知ってもらいたいし、プロジェクトをやるとはそういうこと、他人の生き方、魂に触れる、寄り添う、分かる、しかし、自分は違う人生を生きている、それは矛盾。田舎がいいからってすぐ田舎には住めない。田舎には住めないけど、その感覚で分かれば、答えが見つかる。そういうことをやるのが我々の世界だと思う。

OBOGのみなさま、大勢いらしていただいてありがとうございました。私が学生だったとき、この忘年会の場がとてもよいと思っていました。大好きな時間でした。工学院大学で研究室を持っていたときも、そんな場を設けたいと思って毎年、忘年会を開催していました。研究室を旅立って行ったOBOGが一同に帰って来て集まる場です。一年、いいことばかりではありません。いいことがあるときは来易いけれど、いいことがないときにこそ来る場。そんな場が今でも続いています。何気ないつながりが、毎日の生活の中での行き詰まりをどんなに中和してくれることか、違う方向を見せてくれることか。現役の皆さんも、何年経ってもこの場にきてくれたらと思っています。

二年目ということで自分の立場としてやっていること。講義をすること、演習を受け持つこと、プロジェクト、各々について本当に深く考えた年でした。一年目は、決まっていることをやっていくことで精一杯でした。演習に関しては特に、二年後期、三年生に何を教えるべきなのか、本当に考え込むことがしばしばありました。マガジン忘年会号にも書きましたが、今回は海外の都市を3つ挙げました。去

年は言葉たち、今年は都市たちということで。私事になりますが、11年程前、30才の誕生日に留学から帰って来ました。それから10年くらいdomesticだった。一度も国外に出なかった。昨年、今年と次第に出始めるようになり、今年は特に、海外で様々な人に出会い、情熱をもって都市デザイン、都市計画を考えているということを外に出て、改めて感じました。来年も、このような経験、実践を生かして、都市デザインの位置付け、どう技術があるのか、といったことを演習や講義で伝えていきたいと思っています。

最後に、人と人とのつながり。今年、景観市民ネットというシンポジウムで講演をさせていただきました。そこで声をかけていただいた方と話していると、私の祖母と知り合いだったことが分かりました。祖母は都議会議員として働いていて、保育園の給食サービスを導入するのに尽力したと聞いていましたが、祖母が保育園で講演していたときに、当時保育士になると勉強中の学生だった彼女がその場にいたということでした。私は、必ずしも祖母を意識して日々の生活を送っていたわけではないけれど、自分が今このような仕事をしていることに、祖母の存

**窪田 亜矢 准教授**
**「人とのつながり
これまでがあつて
今がある」**

在が強く影響していることを感じました。野原さんのD論発表の始まり(論文中では最後)で、自分のこれまでの道筋が絡み合つて今があるという話を聞いて、改めて感じたことです。

一番言いたいことは、来年もぜひ、この場でお会いして、ものすごく自慢できることがなかったとしても、ここにいらしてくるだけでも十分、それ自身がこの場に対して大きな力になる。よい年を過ごして来年もお会いしましょう、ということです。

アメニティツーリズム試論 序 An essay on the Amenity Tourism

—観光まちづくりへの感動 ツアコンになって— -Impressed by Kanko-Machidukuri,Becoming a Tour Conductor-

当研究室OBであり、初代マガジン編集長である酒井憲一さんより、ご寄稿頂きました。

An contribution by Mr.Sakai, our laboratory's OB and first magazine chief editor.

研究室OB 酒井憲一

「ほら、西村先生でしょ。岡村、野原、中島、ほら窪田先生でしょ。みな研究室のメンバーです。私のいた研究室です」

2010年元日、大井川鉄道SLツアーに参加し、家山駅に入線したSLが停車するのを待って、ホームで同行の友人に西村幸夫編著『観光まちづくり』(学芸出版社、2009年2月)を見せ、末尾の「執筆担当および執筆者略歴」ページの人名を指で押した。歳末に東大生協書店で見つけた本だった。

すぐにも読みたい気持ちを抑え、SLの前で開こうとたずさえてきたのだった。副題にも西村教授の総論にも、「まち自慢」ということばがあった。研究室のみなさんがこうした領域まで貢献していることを自慢したかった。

SLが粉雪舞う空へ蒸気を噴き上げている。その白い蒸気をスクリーンにして、走馬灯のように西村教授と観光のエピソードがよみがえった。行き着いた先に、2004年4月14日にお台場で開かれた「臨海副都心(Tokyo Water Front City)の可能性を探る『お台場がいま、変わる!』シンポジウムで、観光まちづくりを語る西村パネリストの姿があった。

西村教授は、「臨海地区観光まちづくり基本構想」を策定した臨海地区観光まちづくり検討会の座長で、「職住学遊」を唱え、観光とまちづくりの交点から、トータルにまちづくりをとらえる知的循環システムを推進する先駆者だった。

この日は、2004年度大学院の西村講義「都市設計特論第1」の初日で休講と掲示されていたが、このシンポジウムを課外授業とみなして駆けつけて聴講した。そして、わが指導教官と観光との結節点を初めて知った。

学部講義「都市保全計画」の期間中に、1000ページを超す西村教授の大著『都市保全計画 歴史・文化・自然を活かした街づくり』(東大出版会、2004年9月)が上梓され、その3か月後にスピード刊行した拙著『教え子のノートが記した歴史的講義 西村幸夫「都市保全計画」&東大研究室ホームページ熟年聴講生日誌』(アメニティライフ、2004年12月)の冒頭を「課外・臨海副都心こそ森」(p58)としたのは、その感動を記録したかったからである。

観光のことは「都市保全計画」の講義でも聴いたが、『都市保全計画』では、「歴史的な都市や地区はまた、貴重な観光資源として地域経済に貢献することができる、いわゆる文化観光 cultural tourismをすすめる産業セクターは、21世紀の最大の成長産業のひとつとして期待されている」(p23)と記述されている。

こうしたことに知的触発を受けた私は、ライフワークにしているアメニティの大きな体験の場のひとつが旅であるという認識にコンセプトを与えられ、アメニティツーリズムをめざして、2009年11月に旅行業に定める旅程管理主任者の資格をとった。いわゆるツアーコンダクターである。(2010年1月4日)



▲お台場シンポジウムの西村教授(2004.4.14)



▲大井川鉄道SLと筆者(家山駅2010.1.1)



▲『観光まちづくり』(学芸出版社)

連続シンポジウム「風景の思想」

Symposium on the Idea of Landscape

D3 鄭一止

「風景」は、「景観」とは異なり、景観に見方が媒介されてから表れるものであり、その研究は多様な専門領域に渡り、様々な形で進められている。連続シンポジウム「風景の思想」は12月7日、20日、21日の3日間に渡り、各々の分野の第一線で活躍しているいらっしゃる方々を招いて、歴史、視点、場所の特性という観点から風景を論じるGCOEの企画であった。

都市計画や建築の先生方はもちろん、道沿いの電柱や修理を重ねた古民家などにおける美しさを訴える画家の方、住民の合意を得た、現代人の生活に根ざした身近な景観(景観的文脈)であれば、ちぐはぐなまち並みも有りなのでは、と訴える文化庁の方、生物の種などから景観を考えている景観生態学の方、非日常的なイベントを実施し、市民の注目を集めることを通し、景観などの日常性における実現までへと導こうとしている都市文化論の方、ぶっちゃけ農村の人には景観なんか重要なことではないという農学の方など、深いながらも新鮮で変わった話が盛り沢山で、かなり面白い場であった。

「“保全”と“改善”の間の線引きはどこになるべきか、どう決めるべきか」という、ある学生からの質問は、風景を最終的にどう実現させるかという鋭い質問であり、観客はもちろん、風景における専門家の方々をも熟考させた。これに対し、「まずは、このような議論を重ね、各々の視点や状況に応じて、進んで行くべきだ」という、ある先生の答えは、シンポジウム全体をよくまとめた、風景というものの難しさを象徴する回答だった気がする。



▲歌川広重の浮世絵と風景の関係は?

都市デザイン研究室 情報欄

おし
らせ
シンポジウム開催!!
神楽坂の『粹』を受け継ぐ
～キーワードとまちなみルール～

- 日時: 1月27日(水) 19:30~21:00
- 場所: 東京理科大学森戸記念館2階会議室
- 主催: NPO法人粋なまちづくり倶楽部
- 内容: 現在、地元が中心となって作成している(東大神楽坂班も作業に参加)、「(仮称)神楽坂粋なまちなみルール」と「(仮称)神楽坂まちづくり新キーワード集」を元に、粋なまち・神楽坂の今後のまちづくりを展望します。

1月の予定

1月12日	Barcelona Studies「Cerdà and Urbanism」
1月15日	2009年度第13回研究室会議
1月22~23日	足助PJ現地調査
1月26日	2009年度第14回研究室会議 チュロンコン大学との交流会
1月27日	神楽坂シンポジウム@理科大(おしらせ参照)

編集後記

text_abe

あけましておめでとうございます。新年第1号のマガジンをお届け致します。マガジン編集部一同、本年も研究室の活動をありのままに発信し続けていきたいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。

最近M2の皆様は修論の追い込み時期のようですし、M1にしても何かしら、「騎虎の勢い」と言うのがふさわしいのか、「前門の虎」と言うのがふさわしいのか、何かとせわしなく追われている感じがします。ミスのないように、注意して頑張りたいものです。